中世ヨーロッパ騎士団における誓約の意味

ヘスス・ロドリゲス＝ベラスコ

冒険（aventure）は騎士の本質をなしている。騎士と冒険との間には、人間とその生涯とをつなぐ本質的な関係が結ばれている。しかしながら冒険はすべてが同じというわけではない。中世ヨーロッパの文学は、冒険の概念の進展との関連で、叙事詩的な冒険を宮廷風の冒険から区別している。叙事詩的な冒険は、それを行う者の意思と美徳に由来する。ロランは、フランスの封建戦士である十二臣将を戦友とし、キリスト教国にとっての壮大な冒険を成功させるために、スペインへ進軍する道を選ぶ1。鷲鼻のギヨームは、恩知らずなルイ王に立腹し、オランジュ、ニーム、ナルボンヌやその他の地を占領するため決然として出立する2。シッドは、

政治的な理由に突き動かされ、アルコセルからバレンシアに至るまで、途上で出会うイスラムの城塞をことごとく征服することで、自らの人生と権力を作りあげる決意をする3。英雄的な履歴において叙事詩の騎士は、自らの勇気を表現する中に満足を見い出し、目的を果たすために自らの勇気を充分に制御する。

これに対し宮廷風世界では、冒険は偶然の産物である。騎士は冒険を探し求めることはしない。冒険は騎士の前に現れるのである。騎士は冒険が自分に向けられている場合に限り、これを成し遂げる。そうでない場合には、騎士は挫折を味わうことになる。その冒険が他の騎士に向けられていただけに、挫折はなおさら痛烈である。クー、ゴーヴァン、ランスロが、同じ目的をもって出立する。その目的とは、ゴール王国の王ボドマギュによって囚われの身となったログル王国［アーサー王の国］の住人たちを解放することである［冥界を思わせるゴール Gorre 王国へ入るには、「剣の橋」か「水中の橋」を渡るしか方法がない。周りを水で囲まれたこの王国はイギリス北方に位置すると考えられ、アングルシーやマン島と同定する研究者もいる］。しかしながら、目的を果たすのはランスロだけである。そのランスロも荷車での旅の際には名誉を失う。一方でクーは王妃グニエーヴルを誘拐されることで状況を悪化させ、ゴーヴァンは［ゴール王国への］到着が遅れる4。同じように、「円卓」の騎士たち全員が、厳かな宣誓（serment）をした後で聖杯の探索に向かう。しかし聖杯を発見するのはそのうちの三人だけである。また、この世で最良の騎士であるガラアドだけが、聖杯の恩寵を充分に獲得する5。他の騎士たちは、もはやこの恩寵を受けるに値する条件を満たすことはない。

冒険に備わる偶然性を阻むための手法として誓約（voeu）が使われるのは、まさしく宮廷風の冒険において
である。誓約は、叙事詩的な最後の手段であると考えられるだろう。誓約は偶然の拘束を打ち破ることができ
るほどに強力な、自発的行為なのである。それでも誓約が表しているのは媒介であって、究極の目的ではない。
誓約は一つの冒険ではなく、こうした冒険を行う手段となっている。そのためアーサー王宮廷の執事騎士クー
は、自分の政治的立場と強制的贈与6のとてつもない力を利用して、首尾よく冒険に出立するのである。聖杯
探索の騎士たちは冒険に挑む誓約をするが、おそらく失敗することを充分に心得ている。彼らは聖杯を見つけ
出すまで、一年と一日の間、宮廷には戻らぬ約束をする。冒険に挑む条件を満たすことでクーは、自分の特権
的な地位と、宮廷世界への帰属を危険にさらす。思惑通りに期待した成果が得られない場合には、クーは宮廷
風の舞台から、騎士道世界の中で唯一文明化した集団である「円卓」7の外にある虚無へと、姿を消すことに
なっていたかもしれない。聖杯探索の騎士たちにとって、アーサー王宮廷から遠く離れ、不在が長引けば、政
治的にも精神的にも庇護がなくなりかねない。なぜなら宮廷は騎士団の中心を表し、その外側には騎士を襲う
危機しか認められないからである8。

さてここに、偶然を支配するための媒介的な行為として、文学的なイベント、すなわち誓約が登場する。こ
の行為は、冒険から期待される究極の目的、すなわち、特に騎士としての武勇を果たすことを可能にし、それ
を必然としてくれる。しかしながら、このような形で意思を示せば、冒険に身を委ねる者は相当な困難に拘束
されることになる。なぜなら、誓約を行った時点から騎士は、自分の役割に応じて振舞うことができるような、

コード化された社会の慣例の外に身を置かなければならなくなるからである。

騎士誓約（voeu chevaleresque）は、宮廷風世界の外では何ら意味を持たない。騎士誓約は宮廷風世界では
「騎士団」（ordo）と結びついている9。騎士誓約の最古の形態はしたがって、「円卓」を介して、アーサー王
世界に他ならないこうした騎士団ならびに文明の要素と結びついている。しかしながら騎士宣誓（serment de
cheval erie）（これについては後ほど触れる）のような、ほかの自発的な契約の形態は、文学的なモチーフし
か表してはいない。宮廷風世界では、宣誓は騎士叙任式の際に、騎士団に入るための条件に数えられる重要な
行為である10。

ところで「円卓」は、それ自体で騎士団を表している。ほかの世俗騎士団や宗教騎士団、あるいは騎士団全
般と同様に、「円卓」は王や他の立法者が強要する法律によって支配されているわけではなく、宣誓や誓約に
よって定められた習慣に従うのである。ソールズベリのジョン11やラモン・リュイ12、ドン・フアン・マヌ
エル13といった多くの著作家たちが秘蹟とみなしている騎士道の起源は、楯持ちを正式に騎士にする成年式の
宣誓や誓約に基づいている。再びアーサー王世界に戻れば、「円卓」への入団式の後で、アーサー王が即座に
行う決定がまさしく誓約の範疇に属することが分かる。それは、聖霊降臨祭のように厳かな祭りの期間中に、
アーサー王に冒険が訪れなかったり、すべての騎士に冒険が現れなかったりした場合には、誰も食卓につくこ
とができない、というものである。

さて、王は食卓の用意を命じる。食事の時間だと王が考えたからである――

「王さま」と執事騎士クーが言う、「もしこのまま食卓におつきになりますと、当宮廷の習慣をお破りになることになるように思われまする。なんとなれば私どもはいつも、たいせつな祝宴に際しましては、お館中の騎士の皆さまの眼前で、何かの冒険が宮廷に訪れないうちは、王様は決して食卓におつきにならないのを目にしておりますのです。」

「なるほど」と王は言う、「クーよ、そなたの言う通りだ。その習慣を余はいつもまもってきたし、これからもできるだけまもっていこう。ただ、余はランスロとその二人の従兄弟が健やかな姿で戻ってくれたのがあまりにも嬉しくて、ついその習慣を思い出さなかったのじゃ。」14（天沢退二郎訳）［ただし訳文中の「驚くべき出来事（アヴァンチュール）は本稿の文脈にあわせて「冒険」とした］

王が口にし、仲間のそれぞれが自発的ながらも王にならって口にする誓約は、一つの習慣、「当宮廷の習慣」、いわば慣習法のごとくに確立されており、これを守らなければ仲間どうしの関係を脅かすことになる。誓約は法律と同じレベルで、仲間どうしを結ぶ連帯的なシステムとして現れている。ドミニク・ブーテによれば、「こうした規律を発布するのは王ではない。規律は、王がその保証人にすぎないような、集団による熟慮や決定から生まれるものでもない。規律の由来は効力を失っており、おのおのが行う誓約が全員を拘束することになる。アーサー、「円卓」の騎士たち、なかでもゴーヴァン、最後に王妃グニエーヴルが別々に、騎士団と宮廷の活動をこのようにコード化することに貢献している。」15

この事実はたちまち、王、次いで王侯を中心とした騎士団を創設するために都合のよい発見であると認識された。こうした騎士団は、騎士たちひとりひとりの価値を高めた。「円卓」のまわりで行われた最初の祭りについてドミニク・ブーテが指摘するように、原則として自発的な行為として現れるものは、その有用性と強固さにより、「当宮廷の習慣」という法の力を介して、厳かな宣誓という間接的な方法で強制力を持つ、コード化された最後の手段となる。

スカーフ騎士団は、ヨーロッパで王によって創設された最初の世俗の騎士修道会である。この騎士団の創設は、カスティリャ国王のアルフォンソ十一世による。しかし王がこの騎士団の活動を始めることができたのは一三三〇年になってからであり、その前にいくつかの行政上の問題を解決しなければならなかった16。それでも王は一三二五年にはすでに騎士団の構想を持っていた。騎士団の創設直後にアルフォンソ王は、詳細な法規を作成させた。王はそこに算術のような正確さで、スカーフ騎士団に属する騎士の権利と義務のひとつひとつを記させた。こうした法律万能主義にもかかわらず、騎士団への所属はまったく自由意志によるものにとどまった。騎士団に入るために騎士は、騎士道的な手続によって自らの価値を公に示さなければならなかった。また、ヨーロッパ文学に見られる騎士誓約に似た、厳かな宣誓も口にしなければならなかった。

スカーフ騎士団の宣誓は、もともと二つの部分に分けられる。その一つは、宮廷風世界に属する騎士が持つべき忠誠のシステムと結びついている。宮廷風世界の中心は王であり、王はこのケースでは、スカーフ騎士団

の団員と同じく、師匠としての王である。

あなたは次の二つのことを誓わなければならない。まず、生涯、王に仕え、常に王もしくは王子の家臣であること。もし、王もしくは王子と袂を分かつようなことがあれば、あなたは速やかに王にスカーフを返し、二度とそれを譲ってほしいと請うてはならない。更に、二番目に誓わなければならないことは、あなたはスカーフの騎士を自分の兄弟と同様に愛さなくてはいけない。そして父や兄弟を助けている場合を除いて、スカーフの騎士を助けないということがあってはならない。17

この宣誓は、騎士道の最も基本的な構造に属している。問題となっているのは、どんな形であれ、騎士が忠誠を尽すという誓約である。騎士宣誓と比較した場合の唯一の違いは、スカーフ騎士団の誓約が取り消し可能な点である。騎士道の一般的な宣誓は、洗礼や聖職者の誓願のように、「性格」を刻み付ける「秘蹟」のようなものであるのに対し、スカーフ騎士団への所属は自発的なものであり、騎士によって破棄することが可能である。事実、スカーフ騎士団の誓約は、騎士宣誓のように法制度の一部とはならないで、慣例的な騎士道の規範（コード）に属している。その整然たる特徴は、『スカーフ騎士団憲章』に認められる。

スカーフ騎士団の宣誓にはさらに二つ目の部分があり、こちらは概して文学が伝える騎士誓約の構造と密接に結びついている。自分の意思でスカーフ騎士団に入るためには、媒介的なプロセスに従う必要がある。このプロセスが困難であることが、重要な意味を持っている。最初に志願者は、スカーフ騎士団に所属する二人の

騎士と、休みを取らないで相次いで戦わなくてはならない。志願者がこの試練に勝利した場合には、初めて参加する馬上槍試合で、改めて自分の価値を示さなければならない。その試合はカスティリャで開催され、スカーフ騎士団の騎士たちがこれに参加する。

志願者を中に入れて、二人の騎士と順番に手合わせさせなさい。そしてひとりづつ二回手合わせさせるようにしなさい。これは半日で行うのがいい。そして志願者が、もし、柄頭や剣は折れてないのに剣を手から落とすようなことがあれば、もしくは馬は倒れていないのに馬から落ちるようなことがあれば、彼を敗者とみなし、彼にスカーフを取らせてはならない。志願者が手から剣を落としかつ馬から落ちた場合も同じである。そして、今述べたように、手から剣を落としたり、馬から落ちた人がかつてスカーフをつけていた騎士のひとりであれば、負けは彼にあり、もし二人ともなら二人とも負けであるので、上で述べたスカーフを彼に譲りなさい。そして、彼にスカーフの騎士が行った誓いをさせ、今後それを身につけさせなさい。18

スカーフ騎士団の規律には、宮廷風および騎士道的なタイプの義務が数多く含まれている。「円卓」騎士団にならって騎士たちは、第一に自分たちの仕える王と王国を守らなければならない。第二に、騎士たちの間に、騎士道的な連帯感が築かれなければならない。第三に、スカーフ騎士団の騎士は、助けを必要としている女性なら誰でも守らなければならない。そのために騎士は自分の言葉と身体を捧げなければならない。いま一度「円

卓」騎士団にならって、スカーフ騎士団の騎士たちは、宮廷で開催される馬上槍試合のすべてに必ず参加しなければならない。さらに、幾つかの祭り、中でも聖霊降臨祭には、王のもとに参集しなければならない。こうした義務はすべて、スカーフ騎士団の騎士の宣誓に内在している。なぜなら騎士は最終的に、別の宣誓により、『スカーフ騎士団憲章』に書かれているすべての事柄についての責任を負わなければならないからである。この書物は王の部屋に保管されており、疑いが生じた場合には参照することができた19。

騎士団という考え方は、騎士道のヒエラルキーを意味する。つまり結果として、騎士道の中に騎士道を生み出すことになる。こうした新しい騎士道の宣誓は、自己犠牲を意味するのではなく、騎士道が持つ様々な目標を具体化することや、騎士道がその究極目的へ到達できるようにする諸条件を指している。こうした誓約は、二つの承認を行うことになる。第一に、君主制が誕生する以前のヨーロッパでは明瞭な形をとっていなかった、騎士道に基づく政治的な社会を受け入れることである。第二に、道徳的なコード、騎士道的なコードを受け入れることである。こうしたコードは、宮廷風礼節（クルトワジー）の諸原則を通じて社会の秩序を守るという誓いの形をとる。

文学の描く騎士道をそのまま継承した、宮廷風モデルに基づいて規定されたこうした騎士道は、すぐさまヨーロッパのほかの宮廷に広がっていった。そこでは、こうした種類の数多くの騎士団が創設され、それぞれが独自の規約と仲間どうしの誓約をもった。中でも有名なのは、ガーター騎士団［イングランドのエドワード三

世が一三四八年に創設］、星の騎士団［フランス王ジャン二世が一三五一年に創設］、金羊毛騎士団［ブルゴーニュ公フィリップが一四三〇年に創設］である。これらはスカーフ騎士団にならって君主によって創設された騎士団である。とはいえ、騎士団はこれだけではない。最も地位の高い貴族たちもまた、自分たちの騎士団を創設した。とても雄弁な規約を持っていたために、中でも興味深い騎士団の一つに数えられるのは、一四〇〇年にブシコー（ジャン・ル・マングル）が創設した、「緑の楯の白い貴婦人」騎士団である。この騎士団の組織は、フランスの元帥と、ほかの十二人の仲間が作ったものであり、全員一緒に義務誓約を含む規約を起草した。ブシコーの騎士団運営の大半は、集団で行われていた。この騎士団の習慣は、十三人の団員が投票で決める条項によって定められていた。最も注目すべき事実は、「円卓」創設の折に生まれた習慣に見られるのと同様に、騎士団を生み出すことになった「王は対等な人々の中での首位にすぎない」（primus inter pares）という原則の模倣である20。

騎士誓約がごく頻繁に見られるのは、たいていは騎士集団自体の内部である。「円卓」騎士団であれ、スカーフ騎士団であれ、金羊毛騎士団であれ、あるいはマイナーであるが政治上何らかの連帯感を持ったほかの騎士団であれ、事情は同じである。膨大な騎士道の百科全書とも言うべき『ペルスフォレ物語』［十四世紀初頭］では、騎士世界全体の系図が、アレクサンドロス大王を皮切りに、念入りに分析されている。アレクサンドロスがポロスに勝利して以来、アレクサンドロスの世界は安定する。こうした安定が初めて現れるのは、騎士道に基づく友愛のうちに集い異国の軍隊と戦った騎士たちのとる夕食である。いにしえの騎士団の精鋭が囲む食

卓は、雉にかけて一連の最初の誓約を行う場として使われる。雉は実に高貴な鳥であり、精鋭は食事中にこれを分けて食べる21。

こうした考え方はそのしばらく前に、ジャック・ド・ロンギュイヨンによって強調されていた。ジャック・ド・ロンギュイヨンは、『アレクサンドロス大王物語』の文体をまねて、同じ『物語』の第三枝篇に補筆を施したため、補筆部分は第三詩篇とともに伝えられることが多かった。それは有名な『孔雀の誓約』22［一三一二年］である。この作品は、一連の続編や修正を生み出した。その中にはブリーズバール（ジャン・ル・クール）の『孔雀の償い』23［一三三八年以前］や、ジャン・ル・モットが著した『償い』の続編『孔雀の完済』24［一三四〇年］などがある。こうした誓約の内容は、基本的に宮廷風で物語的であり、果敢・勇気・女性擁護といった諸問題に集中している。それは騎士団の団員が行う自慢たらしい「無意味な誓い」（jurement）であり、先述した君主や貴族が創設した世俗の騎士団が定めた諸条件と何ら変わらない。しかし、これとは逆に、『孔雀』のサイクル、特にジャック・ド・ロンギュイヨンが著した部分は、こうした誓約の本当の機能を明らかにしてくれる騎士誓約のタイプを生み出している。

私が念頭においているのは、それを満たす諸条件が宮廷風ではないが、明らかに王侯や君主が創設し、政治的活動に直接結びついた騎士誓約である。イギリスやブルゴーニュの宮廷で行われた『青鷺の誓約』や『雉の誓約』に認められる態度は、仲間どうしの誓約が辿った進展の見本を提供してくれる。仲間どうしの誓約から

受け継がれたのは、ただ単に戦士機能についての文学的な見方だけではなく、君主制タイプの政治的態度も含まれる。なぜならこの進展は、王国のイメージを死に物狂いで求めていた王侯の宮廷に認められるからである25。『青鷺の誓約』や『雉の誓約』では、アーサー王の表象が予告していた、誓約を習慣に変える力と、それと相関関係にある事項が利用されている。その事項というのは、親しい騎士たちがこうした条件を受諾すれば、騎士団という世界・集合体の規律を認めることになるということである。しかしながら、こうした誓約の特徴をひとつひとつ辿ると、様々な現実に行き当たる。おそらくガーター騎士団の創設以降に行われた『青鷺の誓約』は、ロベール・ダルトワ［一二八七―一三四二］の裏切りを反映している［フィリップ・ダルトワの息子ロベールは、おばのマティルダから相続領を奪われ、これを取り戻せないまま、イギリスのエドワード三世に仕えることになる］。誓約が自分たちの王を取り囲むイギリスの騎士たちの連帯感の証であるとしても、それが百年戦争を招くことになった戦争への批判を表明していることは間違いない26。一方で『雉の誓約』は、十五世紀後半のブルゴーニュとフランスの間に存在した緊張関係を表している。ブルゴーニュ公フィリップは［対トルコ］十字軍の誓約を行い、それを自分に仕える騎士たちひとりひとりに強要する権利を不当に手にする。しかし同時に公は、十字軍に出発するという自らの誓約をフランス王の御意次第であると述べる。公は一方で公国での優位を主張し、他方でフランス王国への従属を明らかにしている。

結論に入ろう。騎士誓約は模倣の誓約である。それは反復される条件であり、同時に行動の指針（モデル）、「習慣」（consuetudo）、騎士団の資格を保持することの受諾を意味する。私が強調したいのは、誓約が意味を

持つのは、騎士道の広がりが、組織だった集団を配する王侯にとって統率され、支配された世界の中だけだということである。「円卓」騎士団は王侯によってまとめられ、王侯は、誰もがはっきりと認める、偶然の支配する冒険を強要する。一層緊密な構成を持つスカーフ騎士団は、騎士が請合うような冒険のタイプを定着させる。アレクサンドロス大王の仲間たちが取り囲む食卓は、『孔雀の誓約』を行う場として使われ、冒険が終わったばかりであることを再確認している。最後に、ロベール・ダルトワの呼びかけに従ってイギリスの騎士たちが誓約を立てたこと（『青鷺の誓約』）に由来するガーター騎士団は、『雉の誓約』を行った金羊毛騎士団とともに、入団にあたり己の力量を見せ、己の勇気を制御することを、誓約によって条件づけられるような冒険開始を約束するのである。

騎士誓約というのはしたがって、騎士団内部での集団的な行為である。それは、騎士団の創設者が定めた諸条件によって連帯契約の枠を決め、騎士団の団員たちにこの契約を反復するように強制する。当然、こうした誓約の直接的な効果としては、誓約を立てるように強要した者の命令を受諾することが挙げられる。誓約は、それを行う者を個別化し、規約の定めるところに従って誓約を繰り返す義務を負った人々に強制力を持ってくる。こうしたことが騎士団における騎士誓約の最終的な目的であり、アーサー世界で特に巧妙なのは、その振舞が習慣となるような君主、王侯が指揮する騎士道世界を作り上げたことである。背くことができなくなるにつれて、習慣はついには法律になるのである。

（福井千春・渡邉浩司訳）

注

1 *Chanson de Roland*（『ロランの歌』）[邦訳は神沢栄三訳、『フランス中世文学集一』、白水社、一九九〇年、所収]

2 *La Chanson de Guillaume*（『ギヨームの歌』）[邦訳は佐藤輝夫訳、『世界名詩集大成一　古代・中世篇』、平凡社、一九六三年、所収], *La Prise d'Orange*（『オランジュの陥落』）, *Le Charroi de Nimes*（『ニームの荷車隊』）

3 *Cantar de Mio Cid*（『わがシッドの歌』）[邦訳は牛島信明・福井千春訳、国書刊行会、一九九四年]

4 Chrétien de Troyes, *Le Chevalier de la charrete*（クレチアン・ド・トロワ『荷車の騎士』）[邦訳は神沢栄三訳、『フランス中世文学集二』、白水社、一九九一年、所収]

5 *La Queste del Saint Graal*（『聖杯の探索』）[邦訳は天沢退二郎訳、人文書院、一九九四年]、「ランスロ＝聖杯」に属する散文物語

6 強制的贈与というのは事実、冒険の契機の一つである。贈与を求める者だけが贈与がもたらすものを心得ているのに対し、贈与をする者はよく考えもせずに贈与をし、自分が何を与えようとしているのかを知らない。そこから危機が生ずる。そのため、偶然の力が増えることになる。エーリッヒ・ケーラーは『宮廷風叙事詩における理想と現実』（スペイン語版は Barcelona, Sirmio, 1990、ドイツ語原本は一九五七年、再版は一九七〇年）のなかで、文学を対象とした社会学的な観点からこれを分析した。ジャン・フラピエ「『強制的贈与』のモチーフ」（Maria Luisa Meneghetti, éd., *Il romanzo*, Bolonia, Il Mulino, Strumenti di Filologia Romanza, 1992, p.347-387）を参照。

7 「ブルターニュの素材」は概して、換称法により、ブルトン人が文明化した民族であることを示す傾向にある。アーサーの物語はこの点で模範的である。なぜならアーサーはリヨン王が率いるサクソン人のような実に粗野な民族と戦う（擬ボロン作『マーリン（メルラン）物語』）からである。それだけでなくアーサーは、かつては文明を築き、ブルトン文明の源泉でさえある民族に対しても明らかな敵意を示すからである。ローマ人のケースがこれにあたる。散文物語群「ランスロ＝聖杯」に属する『ランスロ本伝』に登場するローマ皇帝ポンス・アントワーヌの明らかな不手際は、こうした事実をはっきりと示す一例である。この一例は、原初の「権力と学問の移転」（translatio imperii studiique）がブリテン島へと向かう現実を示すこ

とを目的としている。最終的には、アーサー王物語群は、アーサーという騎士道的な君主の表象の周辺に文明をつくりあげる際に、こうした方向性をさらに洗練させている。アーサーは「円卓」という、象徴的にも政治的にも完璧な騎士団のもとに置かれている。「円卓」は、あらゆる点で一つの騎士団であり、その偉大なる師匠がアーサーその人である。

8　エーリッヒ・ケーラーによる詳細な分析（『宮廷風叙事詩における理想と現実』）が正しく指摘するように、宮廷風物語では、アーサー王宮廷から出立し遠方へ向かうことで、物語中に危機の要素が生まれる。この危機は主人公が宮廷へ帰還するときに終息する。ケーラーが指摘するように、危機と秩序の連続は線状でもなく唯一のものでもなく、緊張関係が生み出すものである。そうした緊張関係は、一方で冒険への出発が引き起こす騎士道的な危機と、秩序が一時的に回復した後、政治的・精神的安定が引き起こす第二の危機である「惰弱」（recreantise）に起因する。「惰弱」というのは、それ自体に冒険への余地がない以上、当然のことながら反騎士道的な状態である。

9　どんな種類の誓約でも、誓約はその起源から、極めて重要な規律の中で意味をもつ。聖職者の誓願という、キリスト教世界で最古の誓約をもとにすれば、こうした主張を証明するのは容易であろう。事実、三二五年のニカイア公会議で、聖職者の身分を選んだ者はみな、厳かな誓約を口にすることが定められた。受け入れられた身分が高いだけになおさら、こうした誓約は、享楽的な生活を奪い去るものとなる。

10　それでもこのことは一つの問題である。なぜならジャン・フロリ（Jean Flori）の著作『剣のイデオロギー―騎士道の前史』（*L'idéologie du glaive. Préhistoire de la chevalerie*, Genève, Droz, 1983）と『騎士道の発展』（*L'Essor de la chevalerie*, Genève, Droz, 1986）が明らかにしたように、新たな騎士の入団が（師匠の役割を担う）王侯によって決められるような騎士団は存在しないからである。

11　*Policraticus*（『ポリクラティクス』）, livre VI

12　*Libre de l'orde de cavalleria*（『騎士道の書』）, cap. IV, Barcelone, éd, Marina Gusta, 1980.

13　*Libro del cavallero e del escudero*（『騎士と従士の書』）, cap. XVIII, Madrid, éd. José Manuel Blecua, 1982, vol. 1. こうしたすべての問題については、拙著『騎士団の詩学』（*Poética del Orden de Caballería*, Madrid, Akal, 2007）（印刷中）を参照されたい。

14　*La Queste del Saint Graal*, Paris, éd. A. Pauphilet, 1984[2], p.4-5.

15　D. Boutet, *Charlemagne et Arthur, ou le Roi imaginaire*（ドミニック・ブーテ『シャルルマーニュとアーサーあるいは想像上の王』）, Genève, 1992, p.339. この点についてドミニック・ブーテは、叙事詩に固有の封建的な法律と、祈願を行う最初の習慣との違いも強調している。後者は特別に選ばれた習慣であり、宮廷風アーサー王世界の規律システムを作り出すのに関わっている。

16　Peter Linehan, "Alfonso XI of Castile and the Arm of Santiago (with a note on the Pope's foot", dans P. Weimar et A. Garcia y Garcia, *Miscellanea Domenico Maffei. Historia. Jus. Studium J.*, Francfort, 1993.

17　*Ordenamiento de la Banda*, chapitre II. 引用は（議論の余地がある）次の版による。Alfonso de Ceballos-Escalera y Gila, *La Orden y Divisa de la Banda Real de Castilla*, Madrid : Prensa y Ediciones Iberoamericanas, Coleccion Pensevante Borgona, 1993, p.58-59.

18　*Op. cit*, chap. III, p.59-60. こうした条件は、スカーフ騎士団への入団を望む場合にのみ必要であることを指摘しておきたい。「こうした条件は、スカーフ騎士団の一員になることを望む人たちのもとでしか意味をもたない。しかし、スカーフを獲得するためではなく、己の騎士道を試すために、スカーフ騎士団の騎士たちとの一騎討ちや馬上槍試合を望むものがいれば、ほかの騎士たちが同意すれば、先に列挙したばかりの諸条件を満たすことなく望みが叶えられる。」

19　『スカーフ騎士団憲章』の最古の写本は、パリ・フランス国立図書館蔵スペイン写本三三が伝えている。この写本はおそらくアルフォンソ十一世の晩年に書かれた。挿絵のつけられた羊皮紙のフォリオ版の写本で、序には金の大文字が使われ、残りの部分は赤と青のインクで書かれている。スカーフ騎士団の騎士たちの名前が記された章に続いて、数枚白紙が見られる。このことから、次に名前を記入することになる新たな団員の集まりを想定していた、常に変わらぬ騎士団の規則が存在したと考えられる。『スカーフ騎士団憲章』（*Il Ordenamiento de la Banda*）のような、『憲章』（*Ordenamiento*）の後の写本は、おそらくカスティリャのフアン一世によって発布されたものであるが、団員の様々なリストを含んでいる。

20　*Le livre des faits du bon messire Jehan le Maingre, dit Boucicaut, Mareschal de France et Gouverneur de Jennes*（『フランスの元帥にしてジャンヌの長官、ブシコーと呼ばれた善良なジャン・ル・マングルの武勇の書』）, éd. de Denis Labande, Genève, Droz, Textes littéraires français, 331, 1985, lib. I, chap. XXXVIII-XXXIX.

21 *Roman de Perceforest*（『ペルスフォレ物語』）, livre I, éd., J.H.M. Taylor, Genève, Droz, Textes littéraires français, 279, 1979.
22 R.I.G. Ritchie éd., dans *The Buick of Alexandre*, Edinbourgh-Londres, Scottish Texts Society, 1921-1929.
23 R. Carey éd., Genève, Droz, Textes littéraires français, 119, 1966.
24 R. Carey, Chapel Hill, University of North Carolina Press, 1972.
25 ほら吹き（gab）あるいは自慢たらしい誓約の伝統は、道化調の叙事詩文学によく見られる。これはおそらく、「ポストクラシック」と呼ばれるアーサー王物語と同時代のものである。この伝統はおそらく、アーサー王物語に見られる派手な誓約や諸条件に対する返答となっている（Victoria Cirlot, “La estética postclasica en los romans arturicos en verso del siglo XIII”, dans “Studia in honerem prof. Martin de Riquer”, Barcelone, *Quaderns Crema*, 1991, vol. IV, p.381-400）。例えば、こうした作品の最古の例である『シャルルマーニュの巡礼』（*Pèlerinage de Charlemagne*）を挙げておこう。この作品にはフランスの十二臣将のほら吹きが認められる。
26 ベルン写本三三三をもとにしたベルトーニ（G. Bertoni）の古書体学に基づく版(*Archivum Romanicum*, 5, 1921, p.426-436).
27 「雉の誓約」には二つの版が存在する。一つはオリヴィエ・ド・ラ・マルシュ（Olivier de la Marche）が伝える版、もう一つはマチュー・デスクーシー（Mathieu d’Escouchy）が伝える版である。これらの版を伝える特に重要な断片は、最近、コレット・ボーヌ（Colette Beaune）によって刊行されている（Danielle Régnier-Bohler, *Splendeurs de la cour de Bourgogne*, Paris, Robert Laffont, Bouquins, 1995, p.1129-1192）。
28 王国をつくり上げるための政治的活動の進展は、ベルナール・グネ（Bernard Guenée）が『十四世紀と十五世紀の西欧―王国』（*Occident aux XIVe et XVe siècles. Les états*, Paris, PUF, Nouvelle Clio, 1991[4]）で明らかにした。こうした進展を促した政治的思想の芽生えは、ジャック・クリナン（Jacques Krynen）が研究対象とした（『王の帝国―フランスにおける政治思想と信仰、十三世紀―十四世紀』*L’empire du roi. Idées et croyances politiques en France, XIIIe-XIVe siècle*, Paris, Gallimard, 1993）。騎士道的イデオロギーに基づく王制という考え方は、拙著『十五世紀の騎士道に関する論争』（*El debate sobre la caballeria en el siglo XV*, Valladolid, Junta de Castilla y Leon, 1996）で説明を試みたように、十五世紀にはフィレンツェ、ブルゴーニュ、カスティリャで共

通して認められる。このように騎士道的な国家の典拠のシステムの探求は、中世の騎士道がローマの騎士道をじかに継承したものであるという考え方に淵源を持っている（私は現在、「ミーレス miles とエクエス eques の間―ローマの騎士道に直面したヨーロッパの宮廷文化」という総称的な題目のもとで、こうした典拠となる枠組みに関する一連の研究を行っているところである）。
29 B.J. Whitting, “The Vows of the Heron”, *Speculum*, 20, 3, 1945, p.261-278.

訳者付記

ここに訳出したのは、ヘスス・ロドリゲス＝ベラスコ（Jesus Rodriguez Velasco）によるフランス語の論考 Le sens du voeu dans les orders chevaleresques européens du Moyen Age である。訳文中、「誓約」と訳した voeu は、冒険に挑む者が行う儀礼的行為全般にかかわり、「宣誓」と訳した serment は「誓約」の中でも最後に口にする誓いの言葉を指している。また訳文中、［ ］をはさんで補った注は、訳者が補ったものである。

ヘスス・ロドリゲス＝ベラスコは一九六五年スペイン、バリャドリー生まれ、バリャドリー大学からパリ第三大学に留学し、高等師範学校を修了する。一九九五年よりサラマンカ大学（スペイン）助教授、二〇〇二年よりカリフォルニア大学バークレイ校の助教授、現在に至る。代表的著作には『十五世紀の騎士道に関する論争』（一九九六）、『「賢者マーリンの断末魔の叫び」の創作と普及』（共著）（二〇〇一）、『カスティリャの騎士道』（共著）（二〇〇一）、また校訂本の編纂はガルシ・ロドリゲス・デ・モンタルボ『ガウラの騎士アマディス』（一九九七）、『賢者マーリンの断末魔の叫び』の校訂ならびにファクシミリ版の刊行（二〇〇一）、そして翻訳はトルバドールの詩人ライモン・ビダル・デ・ベサルー『嫉妬の罰』（一九九九）、十三世紀オクシタニアの武勲詩『ダウレルとベトン』（二〇〇〇）など多岐にわたる。